

卒後支援としての MOST 方式による 「学びのコミュニティ」構築に関する実践的研究

三浦 和美*

*東北福祉大学教育学部

要旨:大学教職課程卒業後の学生をどのように支援していくかは大学にとって課題となっている。そこで、MOST 方式に倣って卒業生に対してデジタルと対面による交流を組み合わせ「学びのコミュニティ」を構築した。2年間の研究を行った結果、デジタルの交流はあまり活用されず、卒業生は教員やゼミ生との対面交流や学びの機会の設定を期待していることが明らかになった。

キーワード:教職課程, 学びのコミュニティ, 卒後支援, デジタルによる交流, 対面交流

1. 問題と目的

近年、教員の資質能力向上の観点から養成・採用・研修の一体的改革が推進されている。その背景には、教員の大量退職や大量採用等の影響により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技術の伝承をうまく図ることができない状況がある。文部科学省(2016)は、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(答申)」において、学び合い、高め合う教員育成コミュニティ構築に向けて、継続的な研修を充実させていくための環境整備を図る等早急な対策が必要である⁽¹⁾と指摘している。

卒後支援とは、大学を卒業した卒業生に対して現場に入ってから課題解決や新しいスキルの開発等を支援することである。大学によっては、卒後教育⁽²⁾または卒後支援教育⁽³⁾として、独自のプログラムを実施している場合もある。

これらのことは、教員養成を行う大学にも変化をもたらしている。所属する学科においても、2012年度から卒業生を対象として「教育フォーラム」を開始することとなった。主な内容は、年1回卒業生が参加しやすい土曜日午後等に教育課題等に関する講演会や分科会形式で卒業生の実践発表を行うことを中心としたものである。

筆者が指導したゼミ生は、2009年度1期生から

2015年度7期生までで69名である。そのうち教員採用状況は、小学校教員54名であった。東北地方での採用は、宮城県16名、山形県9名、福島県4名等で計33名、甲信越・関東地方は21名となっている。

一方で、年々増加する卒業生への対応は年1回学科が行う「教育フォーラム」だけでカバーしきれないところがあった。会場が大学と設定されている年1回の「教育フォーラム」では、大学まで出向いて参加できる卒業生は限られてしまうことがあった。また、卒業生の中には、教育現場で孤立感を強めたり、保護者対応の難しさに苦慮したりする等の個別の課題も見つかった。

こうした状況を克服するために、卒業生に対する効果的な卒後支援の方法が求められていた。卒後支援について模索していた時期に、京都大学高等教育開発推進センター募集により、第4期 MOST フェローとなって1年間の活動を開始することとなった。MOST⁽⁴⁾とは、Mutual Online System for Teaching & Learning の略称であり、オンライン上に構築した招待制の大学教員のための教育研修の場のことである。

また、MOST フェローの研修の方法は、オンラインでのメンバー同士のやりとりと年3回の対面交流を組み合わせている点に特徴がある。もともとは「大学教員として支え合える学びのコミュニ

ティがほしい」という切実な思いから作られたものである。

こうした考えで構築された MOST 方式の方法は、ゼミ卒業生への卒後支援の参考となるものであった。また、これまで教員だけで行っていた対応を MOST 方式に倣い、デジタルと対面という2つの方法を組み合わせることで効果的な卒後支援が実現できるのではないかと考えた。さらに、これまでゼミ卒業生を研究対象として卒業後の支援を実践する研究も希少であった。

そこで、本研究では、MOST 方式に倣い、デジタルと対面交流を組み合わせた「学びのコミュニティ」を構築し、卒後支援の方法を実践することとした。

2. 方法

2.1. 対象

研究対象は、TF 大学2015年度卒業生17名である。卒業生17名の卒業時の進路は、小学校教員（正採用）7名、講師8名、市役所非常勤職員1名、国立大学法人大学院進学1名であった。卒業後に個人毎に研究への参加の同意書を郵送した。

2.2. 研究期間

研究期間は2016年度から2017年度の2年間である。

2.3. 研究概要

2.3.1. 専門家へのインタビュー調査

「学びのコミュニティ」構築に先がけ、卒業生との交流について詳しい OT 大学助教 H 氏の協力を得て、インタビュー調査を行う。

事前に面接同意書を郵送し、同意の確認を行った。面接は、半構造化面接法によるインタビュー調査とし、H 氏の所属する大学内の一室で行われた。発話内容を IC レコーダーに録音した。その後、逐語録を作成し、卒後支援の概念図を作成した。

この概念図を本研究の枠組みとして活用することとした。

2.3.2. 「学びのコミュニティ」構築の概要

本研究の柱となる「学びのコミュニティ」構築は、デジタルによる「学びの交流会」と対面によ

る「学びの交流会」の2つの方法によって構築された。

(1) デジタルによる「学びの交流会」

まず、研究対象となった卒業生に対して、デジタルによる交流方法として「チャット (chat)」を選択した。

チャットとは、「雑談」を指し、ネットワーク上でリアルタイムなコミュニケーションを行うことを意味している。ネットワーク上にメッセージを載せることで、電話のように完全なリアルタイムでの返答を迫られずに、それぞれのペースで気軽に会話をするための手段である。教員と卒業生との双方性のある交流が可能となるチャットの特徴が有効なのではないかと考えた。

2.3.3. 対面による「学びの交流会」

次に、対面交流は、年4回実施で2年間では8回程度の実施を予定する。

まず、宮城県・山形県・福島県・埼玉県4か所に教員が出向いて行う。宮城県・山形県・福島県は、卒業生の出身地と勤務地が同一であるため、教員が出向くことにより、卒業生の負担感を減らし、「学びの交流会」への参加の意欲を高めたいと考えた。

また、埼玉県は卒業生の出身地ではないが、出身県を離れて関東圏で勤務する卒業生にも対面での交流の機会を与えたいと考えたため設定した。

対面による「学びの交流会」の主な内容は、卒業生からの実践報告を中心として在校生との交流を中心に行う。

「学びの交流会」では、有識者を招いて行うシンポジウムも実施する。教育全般や社会科教育に精通している大学教員を講師とし、本研究の趣旨を説明し講演を依頼した。講演会はゼミ卒業生や在校生に加えて、一般にも開放するよう2年間で2回計画した。

各回の「学びの交流会」は、事前に案内のデジタルデータをゼミ卒業生と在校生に配信し、当日の参加を呼びかけた。また、「学びの交流会」実施後に大学ホームページに活動報告の記事を掲載する。記事執筆は筆者が行う。

2.4. 評価

対面による「学びの交流会」に参加した卒業生インタビュー調査を行い、大学卒業後の卒業生の実態を把握する。参加者には事前にアンケート項目を知らせ、「学びの交流会」終了後に面談した。インタビュー項目は、以下の5項目である。

質問1. 卒業後の就職先、担当学年を教えてください。

質問2. 卒業後教育現場に入って感じたことを教えてください。

質問3. 卒業後大学あるいは大学教員に支援してほしいと思うことはありますか。

質問4. 大学での学びを継続させていますか。

質問5. 「学びのコミュニティ」があれば参加したいですか。

また、「学びの交流会」に参加した卒業生にアンケートに感想を自由記述してもらい、卒業生への卒後支援について評価を行うこととした。

3. 結果

3.1. 専門家へのインタビュー調査結果

専門家H氏へのインタビュー調査は2016年8月30日に行われた。H氏の勤務校は、卒業生に対して「エンドレスの支援」を掲げ、地域に根差した保育士養成を長きに亘って行っている。

インタビューの結果として概念図を図1に示す。

H氏へのインタビュー調査の結果から、卒業生への支援を考える時に、図1に示されたように、まず、「対面で」を考え、それを踏まえて「SNSで行う」という示唆を得た。卒業生との関わり方はどの方法がよいかではなく、卒業生とどう関わっていくかを深く考えていくことが大事である。卒業生にとって、帰ることができる場所、同氏の言葉を借りれば「投げ所」となれるような関わり方を模索することが求められていることが分かった。

しかし一方で、卒業生との関わりとなるとお互いに仕事を持っているため、勤務時間外での関わりが多くなり、教員としての負担もより大きくなるといったデメリットもある。

こうしたデメリットがありながらも、卒業生とのつながり、関わりを続けようとするのは、大学として、また、大学教員としての使命をそこに感じるからであり、「エンドレスのサポート」を掲げているところに大学の在り方そのものが示されていた。

今後本研究で卒業生との交流として取り組む連携の方法を構想し実践していくことで、大学及び大学教員の在り方をも問われていることを念頭に置く必要があることが示唆された。

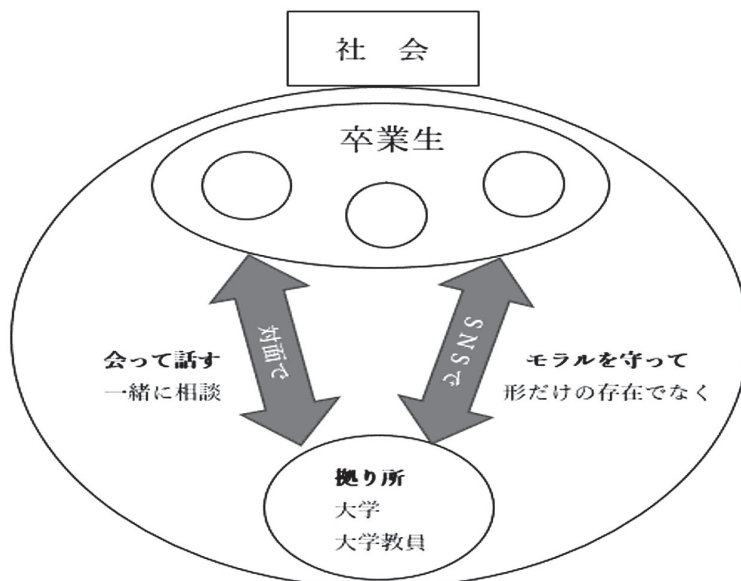


図1 卒後支援に関する概念図(H氏へのインタビューを基に作成)

3.2. デジタルによる「学びの交流会」結果

デジタルによる交流は、「TF 大学三浦ゼミオンライン「学びの交流会」」と命名された。

はじめに、「TF 大学三浦ゼミオンライン「学びの交流会」」をグループチャットとして登録した。チャットの運営は無料であった。

次に、グループチャットの画面から卒業生のアドレスにチャットワークへの招待を送った。チャットによる交流は、山形県で行われる対面での「学びの交流会」開催に合わせて、2016年10月に開始した。

年度ごとのチャットワーク活用状況は、表1に示す通りである。2016年度のスレッド総数は、教員から24、卒業生から7であった。教員からは対面で行う「学びの交流会」への案内を中心にして発信し、卒業生からは近況等が報告された。そのスレッドは互いに閲覧できる状況であった。

一方、2年目となる2017年度のスレッド総数は、教員から7、卒業生から0であった。また、卒業生1名から「チャットではなく、個別にメールで連絡したい」との申し出があった。デジタルによって交流することへの懸念が形となって表れた。2年目にはスレッドの返信はなかった。

表1 チャットワーク活用状況

(数字はスレッド数を示す)

年度	教員から	卒業生から
2016年度	24	7
2017年度	4	0

3.3. 対面による「学びの交流会」結果

対面による「学びの交流会」の実施状況は、2016年度5回の実施で合計80名、2017年度3回の実施で合計75名であった。2年間の合計は155名であった。そのうち、研究対象となった卒業生の参加は、2016年度4名、2017年度2名の参加であった。

次に、年度毎の実施状況について述べる。

(1) 2016年度「学びの交流会」実施状況

2016年度実施した対面による「学びの交流会」は、2016年10月15日、10月29日午前・午後(1日2会場)、11月19日、12月24日(シンポジウム)計5回であった。

10月15日山形県山形市実施の参加者は、卒業生5名、在校生11名であった。10月29日午前中に福島県福島市内で実施し、参加者は卒業生5名、在校生3名であった。10月29日午後には埼玉県さいたま市で実施し、卒業生2名、在校生0名であった。11月19日宮城県仙台市実施の参加者は卒業生2名、在校生15名であった。会場はいずれも参加者が集まりやすい駅近にある貸会議室や勤務校キャンパス教室を使用した。

卒業生には実践報告の発表を事前に依頼した。交流会当日は、卒業生の実践報告と教員からの講演を行ったのち、質問タイムを設け参加者同士の自由な交流会を実施した。

毎回の対面による「学びの交流会」は、ホームページに掲載された。記事の一部を図2に示す。

卒業生からは「異学年の交流はとても刺激的で、新たな発見があり、楽しかった」、「学びが深まり、充実した日になった。山形県開催ということもあり、より身近に感じ、励みになった」という感想があった。また、在校生からは、「学校現場での体験を聞くことができ、参考になった」、「小学校での実践例が分かり、参加してよかった」等の感想があった。

12月24日開催のシンポジウムでは、東北大学大学院教育情報学研究部長 渡部信一教授による講演(演題「教師から生徒に「知識」はどのように伝わるのか」)と卒業生2名による実践報告を実施した。

卒業生2名、在校生42名、一般10名で合計54名の参加があった。在校生は担当しているゼミ生のみであった。また、一般参加は在仙の大学教員等であった。

研究対象の卒業生の参加はなかった。

(2) 2017年度「学びの交流会」実施状況

2017年度実施した対面による「学びの交流会」は、2017年11月11日、11月18日(シンポジウム)、11月25日の計3回であった。

11月11日福島県福島市実施の参加者は、卒業生1名、在校生0名であった。11月25日山形県山形市実施の参加者は、卒業生4名、在校生3名であった。交流会の内容は、2016年度同様で卒業生の実践報告と教員からの講演を行ったのち、質問タイムを設け参加者同士の自由な交流会を実施した。

学科TOP	理念	カリキュラム	進路・就職	教員紹介	学生の声
-------	----	--------	-------	------	------

10月15日三浦ゼミ「学びの交流会」が山形市で開催され、卒業生5名、2年生8名、3年生1名、4年生2名が参加しました。小学校教員として活躍している先輩の発表、教員の講話、交流タイムなど楽しく充実したひとときを過ごしました。

今回は山形県出身の卒業生が「一人はみんなのために、みんなは一人のために」と題し、学級経営の基礎に「人の話を聞く」ことを大切にする、話し合いや振り返りを教科指導・生活指導の全般に取り入れ、支え合う集団づくりを行っているという発表を行いました。



卒業生の発表



参加者の様子

卒業生の感想

- 「学びの交流会」に参加でき、お陰様でとても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。異学年との交流は、とても刺激的で、新たな発見や気づきもあり、楽しかったです。今の自分にとっては、同世代と関わる機会や、こうして実践的な話を聞き、悩みを相談できる場は本当に有難いです。今後も機会があれば、参加してこれからの活力にしていきたいです。
- 交流会に参加し、学びが深まり充実した日となりました。今回のように、卒業後に先輩方の話や相談、質問を聞くことができるのは貴重な体験だと思います。山形県開催ということもあり、より身近に感じ、励みになりました。

学生の感想

- 学校現場で教員をされている経験談を詳しく聞くことができ、参考になりました。
- ちょっとした質問にも詳しく答えていただき、アドバイスをたくさんいただきました。
- 小学校での具体的な実践例が分かったので、参加してよかったです。
- 自分も山形県で教員になりたいと思い、これから頑張ろうと思いました。初めて仙台市以外の東北地方で交流会を開催しましたが、卒業生や在学生の多い地元で行うことで、双方にとってよい学びの機会が創出できると思いました。

図2 対面による「学びの交流会」(2017年10月15日山形県) 大学ホームページ

また、11月18日開催のシンポジウムでは、前文部科学省教科調査官 北俊夫国士館大学教授による講義(演題「新学習指導要領をどう読むか—改訂のキーワード解説」)を実施した。参加者は、卒業生2名、在校生65名、一般3名計70名であった。在校生は担当するゼミ以外にも2つのゼミから参加があった。一般参加として社会科教育を専門とする元小学校教員3名の参加があった。

研究対象の卒業生の参加は1名であった。

3.4. インタビュー調査結果

各県で行われる対面による「学びの交流会」に参加した研究対象の卒業生のうち、1年目と2年目に連続してインタビュー調査が実施できたのは、1名のみであった。

ここでは、2年連続してインタビュー調査を行った卒業生の調査結果を示す。

3.4.1. インタビュー調査結果(1年目)

質問項目と回答は以下の通りであった。

質問1. 卒業後の就職先、担当学年を教えてください。

⇒小学校で講師、7学年の担当になりました。1年から6年の担任は持っていません。4年音楽、5年理科・書写・図工、6年理科・音楽が担当でした。

質問2. 卒業後教育現場に入って感じたことを教えてください。

⇒良かったことは一つの授業を3回できるので、すぐに直せること。学級経営を見られることです。

困ったことは教える人数が多いこと。自分でも何が分からないのかが分からないことでした。

8月に入ってから病休の先生に代わって担任を持ちました。帰るクラスがある安心感がありま

した。

質問3. 卒業後大学あるいは大学教員に支援してほしいと思うことはありますか。

⇒今もしていただいているので、先生に来ていただいて、会えるのがうれしい。

質問4. 大学での学びを継続させていますか。

⇒教育相談は学んでいて良かったと思います。児童や保護者との関わり方、声のかけ方を学びました。防災士の資格を取っていて良かったと思います。子どもの命を守ることが大切だと思います。

質問5. 「学びのコミュニティ」があれば参加したいですか。

⇒今日は参加して良かったです。また、参加したいと思います。是非継続していただきたいです。

3.4.2. インタビュー結果 (2年目)

質問項目と回答は以下の通りであった。

質問1. 卒業後の就職先、担当学年を教えてください。

⇒1年目は小学校で講師をしていましたが、出身県の教員採用試験に合格し、2017年度から特別支援学校教諭になりました。

質問2. 卒業後教育現場に入って感じたことを教えてください。

⇒自分は、大学在学時に幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援学校教諭の3つの免許を取りました。その時はとても忙しかったんですが、そのことが、現在特別支援学校の教員になって特に役に立っていると感じています。音楽とか手遊び等をしている時そう感じる人が多いです。頑張っってよかったなと思います。

質問3. 卒業後大学あるいは大学教員に支援してほしいと思うことはありますか。

⇒今回この交流会に参加したいと言っていた友達がいましたが、学校の日程の関係で参加できませんでした。小学校と特別支援学校等校種が違くと日程が合わないことも多いですが、最新の教育事情を聞くことができるため、回数は少なくても交流会はずっと続けてほしいと思います。

質問4. 大学での学びを継続させていますか。

⇒今は支援学校なので社会科の教科を教えること

はないのが残念に思います。新聞は読むようにしています。

質問5. 「学びのコミュニティ」があれば参加したいですか。

⇒質問3と同じです。

この卒業生の場合、1年間の講師経験を経て出身県の教員として採用された。大学在学時の学びや1年目の講師経験が現在の仕事に活かされていることが分かった。

3.5. アンケート結果 (自由記述)

対面による「学びの交流会」に参加した研究対象の卒業生7名からアンケートを回収した。その自由記述を以下に示す。

- 少しでも後輩の悩みのヒントになってくれたら嬉しい。先輩にも自分の悩みを相談できるいい機会だった。(山形県)
 - 後輩とお話できてとても楽しかった。(山形県)
 - 是非継続していただきたいです。(福島県)
 - ICT活用について先輩方の話が聞きたいです。(宮城県)
 - 関東にまでお越し頂き、先生やゼミ生と再びお会いしてお話できる機会を頂けて良かったです。この先もこのような機会があれば有難く思います。(埼玉県)
 - 続けていただければ幸いです。(埼玉県)
- 対面交流には概ね肯定的な意見が多く、継続への期待の高さが見られた。
- 質問タイムで時間が足りなかったので、時間があればもう少し長めでもいいのかなと思いました。(山形県)

このように対面交流に対する意欲的な意見も寄せられた。

大学在学時期の違う先輩や後輩との交流が行われる対面による「学びの交流会」は、卒業生・在校生双方にとって学びのある機会となっていることが分かった。また、教育現場で頑張っている先輩の姿に触発され、出身県での教員採用を目指す在校生への刺激にもなっている。

4. 考察と展望

本研究では、MOST方式に倣い、デジタルと対面交流を組み合わせた「学びのコミュニティ」を

構築し、卒後支援の方法を実践した。

はじめに、一つ目の支援の方法としてデジタルによる交流を実践した。卒業生がデジタル世代であることを念頭に置いて「チャット」活用を計画したが、デジタルでのやりとりは思ったほど活用されなかった。1年目は、教員から24、卒業生から7のスレッドのやりとりがあった。2年目は、卒業生からの返信スレッドは0となった。これは、デジタルによる交流で個人の状況が明らかになることへの懸念があったためと考えられ、卒業後の動向把握も個人情報保護の観点から難しいことが明らかになった。

次に、2つ目の支援方法として対面交流を実践した。1年目はシンポジウムも合わせると5回、2年目はシンポジウムも合わせると3回、2年間で計8回実施された。卒業生へのインタビュー結果やアンケートの自由記述には、「回数は少なくとも交流会を続けてほしい」、「先生が来てくれるのはうれしい」、「是非継続してほしい」といった言葉があり、卒業後も教員やゼミ生との対面交流への期待が高いことが明らかになった。

また、前述した2019年10月15日付大学ホームページ記事に見られるように、在校生にとっても教員として実践を続ける先輩に刺激される面も大きい。「学びの交流会」は、卒業生・在校生双方にとってよい学びの機会となっている。

しかし一方で、課題も明らかになった。

まず、研究対象となった卒業生の参加が伸びなかったことである。2年間の研究期間のうち、2年連続で対面による「学びの交流会」に参加しインタビュー調査が実施できた卒業生は、わずかに1名であった。本研究により、大学卒業後の実態を卒業生から多く得ることができると期待していたが、現実的には難しいことが明らかになった。そのため、卒業後の実態を十分把握することができない結果となった。

また、対面による「学びの交流会」開催に当たって、日程調整等も障壁となった。特に、2016年10月29日には、午前中に福島県で交流会を実施し、同日午後には新幹線で埼玉県へ移動といった過密なスケジュールを組まざるを得なかった。土曜日にも学内外の業務がある大学教員にとって、卒業生が参加しやすい土曜日に交流会を実施すること

には日程調整上の無理があった。こうした理由により、2017年度には関東地方等での実施を見送ることとなった。

さらに、卒業生からの指摘にもある通り、小学校と特別支援学校等就職先や学校毎に年間計画や予定に違いがあるため、交流会に参加したいと考えているものの、参加が難しい状況も明らかになった。

本研究により、各自の夢の実現には、時間的にもその道程においてもそれぞれ違いがあることが明らかになった。卒業時に講師等であった卒業生10名のうち、研究2年目終了時点で5名が教員採用試験(小学校)合格を果たした。また、1名が2年間の講師経験を経て、国立大学法人大学院に進学した。これらは、教員に直接報告があったものである。

一人ひとりへの対応は、「エンドレス」の支援を必要とする卒業生に向き合うことであり、そこに大学や大学教員が担う使命が内在していると考ええる。

横須賀(2006)は、「教職に就いてからの学習—この機会は実にたくさんある。新任研修に始まって、教職〇年研修というような教育行政が用意するもの、校内研修とか研究授業のような一校のなかで行われるもの。教員組合が組織する研究活動。そして自由な立場で参加するサークル活動……等々。それらの学習、研究の機会はそれぞれに有意義なものにちがいない。しかし、卒業した大学を活用しての学習、研究活動はそのどれにも属さないものであり、性格がちがったものである。」⁽⁵⁾と述べている。

卒後支援の基盤となる「卒業した大学を活用しての学習」は、その具体的な方法、時期の設定、内容の吟味等についてさらなる検討を加える余地があると考ええる。今後も卒業生に開かれた「学びの交流会」の実践を通して、「学びのコミュニティ」構築に取り組んでいきたい。

謝辞

本研究は、RS160710 東北福祉大学特別研究助成(基盤研究)を受けました。この場をお借りして御礼申し上げます。

文献

- (1) 文部科学省(2016) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)〈要約版〉
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/03/25/1365896_03.pdf (20190915参照)
- (2) 関西学院聖和短期大学ホームページ https://www.kwansei.ac.jp/seiwa_j_college/seiwa_j. (20191030参照)
- (3) 北海道大学臨床薬学教育研究センター
www.pharm.hokudai.ac.jp/erccp/Postedu.html
(20191202参照)
- (4) 京都大学高等教育開発推進センター
MOSTフェロープログラム www.highedu.kyoto-u.ac.jp/most-fellow (20191217参照)
- (5) 横須賀薫(2006). 教員養成これまでこれから, ジアース教育新社.

A Practical Study on the Construction of " Learning Community " by The MOST Method as Postgraduate Support

Kazumi MIURA*

* Tohoku Fukushi University, Faculty of Education

ABSTRACT

How to support students after graduating from the university teaching course has become a major issue for universities. Therefore, a " Learning Community " was constructed by combining digital and face-to-face exchanges with graduates following the MOST method. As a result of two years of research, it became clear that digital exchange was not used much, and that graduates expected to set up opportunities for face-to-face exchange and learning.

Key words: University Teacher Course, Learning Community, Postgraduate Support, Digital Exchange,
Face-to-Face Exchange